

曉鐘の音

49

かね

それに

我が家の鉢植えの白梅は、今年も沢山の花を付けてくれた。もっとも鉢植えであるため、多いといっても「それなりに」ではあるが、一つひとつの花の香はそれほどでもないが、一輪も集まれば、何処からともなく香がする。近所の人が家の階段を上がっていると、ふっと「何の花か?」と思つて振り返る。金木犀や沈丁花や梔子などは、香からすぐに花が連想できるが、我が家のこの梅は、殆どの人は何の花の香か気付かない。玄關のところで振り返れば、そこに花らしい物はこれしかないで、梅花の香と気付くだけである。



もう一本、露地植えの梅の木がある、こちらはピンクの花をつけ、実が目的で植えられた木だ。咲く時期が一月近くずれているので、お互いに顔を合わせることはない。ちょうど今、私の仕事を覗き込むように、ガラス戸の向こうに咲いていて、そろそろ花びらを落とし始めている。先週末では毎日メジロが数羽やってき

て、花芯を啄んでいたが、ここ数日はやって来ない。どうやら盛りを過ぎて香もしなくなつたのか。鉢植えの方は白の八重で、路地の方はピンクの一重だ。もし顔を合わせたら何と言つたらうか、お互い

もつとも、花は競わない。育てた人にお礼を言つてもない。第一、彼女たちは育てられているなんて思つていない。もつとも、最近の研究では、森の中で、木々がグルーブ間で会話を交わしているのではないかと、ということが発表されているから、この梅の木もお互いに何かを話しているかも知れない。「この主人は手入れが悪い」とか、「もつこの鉢に入つて3年目になるので、そろそろ植替へ欲しいんだけど、今年は植替へもらえないだろうか」「それに比べて路地さんは、延びたいところに根を伸ばすことが出来ていいね」「でも、鉢さんはいろいろなところに運んでもらえるからいいな」、なんて言っているかも知れない。

この世はわたしがわたしになつてあなたがあなになつて
(相田みつを)

春になるといるんな花が咲きだす。彼らは「咲きたい」とか、「咲かなくてもいい」とか、背伸びをすることもなけりや、手を抜くこともしない。梅は梅なりに、蕈は蕈なりに、チューリップはチューリップなりに、桜は桜なりに咲く。肥料の行き届かなかつたチューリップは、少しみずぼらしい花を付ける。だが彼女は自分がみずぼらしいなんて思っていない。人間が「ワアきれい!」なんて声を掛けてくれなくても、一向に気にしない。威張ることもなければ嫉妬することもない(と思つ)。ただ、精一杯それなりに咲いているだけだ。「花は咲かざるを得ざるして咲く」とは佐藤一斎の言葉であるが、言い換えれば咲かざるを得ない状態に達しなければ咲かないだけである。アマリリスがそうである。球根を買つてきて植えた年は大抵見事に咲く。だが、ちよと手を抜くと二年目から咲かない。「球」がちよと小さくなるともつ咲かない。「咲かざるを得ない状態」ではないのだから。もちろんほんの少し小さくなつたぐらいだったらそれに咲く。それでも追肥の手入れがなされないと三年目にはほとんど咲かない。花はみんな咲かざるを得ない状態にして、「それなりに咲く。隣の花を羨むこともなく、かといって、いい加減に咲くこともない。それがその「時の」彼女としては、「一杯」なのだろう。一本のトマトの木に一万数千個の実を成らせるのも、彼女としては成長

せざるを得ない状態で成長したので、実を付けざるを得ない状態で実を付けただけだ。当人としては特別頑張つたわけではない。朝顔だつて、ちよと手入れが良ければ、十一月の始めまで咲き続ける。恐らく土が根を締め付けなければ、そして温室の中に入れてあげれば、十二月になつても見栄えのする花を咲かせることはできるだろう。

人間もそれなりに自分を咲かせればよい。桜は桜なりに、蕈は蕈なりに、そして八重は八重なりに、一重は一重なりにさかせればよい。だが、人間の「それなりに」は、どうも花の「それなりに」とは違つようだ。人間の「それなりに」は必ずしも一杯ではない。そのずつと手前で止まっていることが多い。「今」いるところで、昨日と同じことをすることが「それなりに」になつていくこともある。本人も気付いていない花を咲かせる可能性もあるのに、その前に「それなりに」と言つて「画つて」いないか?

今月の一言・今月の一言・今月の一言・今月の一言・今月の一言・今月の一言・今月の一言・今月の一言・今月の一言・今月の一言

今月の一言

「『多逢勝因』は心掛け次第で可能だ。自分一人ではなかなか結ぶことはできないけれども、逢うことはできる。いや、自分を取り戻す必要がある。つまり、人間はできるだけいい機会、いい場所、いい人、いい書物、そういうものにバツタリ出くわすことを考えなければならぬ。これを『多逢勝因』という。」(安岡正篤)

自尊心とは自分を落としめな心である。英語では一般にプライドと訳されるが、プライドには「慢心」も含まれる。だが自尊心には慢心は含まれない。自分を落とさないうために「いいもの」に出くわさなければならぬ。「いいもの」を求めなければならぬ。そのためには己の「状態」が問題になつてくる。己の状態を棚上げして「いいもの」に出くわすことではない。それは相手にとつても、こちらが「いい人」でなければならぬ。人から「いい人」と言われたい人より、「いい人」になれ」と言つた人がいる。実際、巡りの悪い人にはとことん不運がつきまとう。「いいもの」に出くわさないのである。そうなると思ふと益々ムキになる。ムキになればなる程、「いいもの」は逃げていく。やはり「いいもの」に出くわすには、心掛けが必要なのである。自然の中で花を撮っているある写真家の写真に、蝶や蜂が実にいい感じで見えて、ある人が尋ねた。「どうすればこんなシャッターチャンスが掴めるのですか?」と。自然の中でフラインターを覗いたことのある人なら、誰しもこんなチャンスが欲しいと思う。だがその写真家の答えは「蝶の方から一緒に写してと飛び込んでくるだけです」であった。